

「草の根のアフリカ理解」のために

日本とアフリカ大陸の懸け橋としてのアフリカ地域研究



海外交流

竹村 景子*

Masomo ya Kiafrika kama Daraja la Kuunganisha Japani na Afrika

Key Words : African Study, Swahili Language, Noun Classes

【イントロダクション】

筆者は、1985年12月、某国立大学文学部国文科を目指して受験勉強の真っ只中にいた。志望校に入学したら、高等学校の国語科教員を目指すつもりだった。部活動の1年上の先輩から「大阪外大にスワヒリ語専攻ができるらしい」と聞くまでは。その日から数えると、早や25年近くの歳月が流れた。それは、日本で唯一、学部からアフリカ地域研究を学べる体制が大阪外大で発足してから、それだけの年月が過ぎたことを意味する。

スワヒリ語は、1981年から大阪外国語大学外国語学部アラビア語学科の副専攻語として教授され始めた。1986年に専攻語として独立し、以来、個性あふれる教員陣と、「アフリカを知りたい、アフリカから学びたい」という強い思いを持った学生たちが、ともかく様々な活動を行なってきた。研究室の論集『スワヒリ&アフリカ研究』の発行、学生たちによる語科雑誌とスワヒリ語文学作品翻訳集の刊行、スワヒリ語勉強会・読書会の開催、学園祭での語劇上演など、アフリカやスワヒリ語に関することには何でも挑戦してきた。

2007年10月に大阪大学と統合し、外国語学部外国語学科スワヒリ語専攻となったが、これまでの伝統の火を決して消すことなく、スワヒリ語教育とアフリカ地域研究の国内拠点として現在も精力的に活

動しているのである。

【学生たちのパワー】

現在の学生数は、学部から大学院博士課程まで含め100余名にもなる。これだけの人数の学生が、理解度の違いはあるにせよスワヒリ語を聞き、話し、読み、書くことができるというのは、在日タンザニア人やケニア人にとっては、驚きを禁じ得ないことらしい。この中の7割程度は、毎年、旅行や短期留学、放浪(!)という形で東アフリカを中心に訪れており、特に最近は同じ学生が2回、3回と繰り返し出向く傾向にある。スワヒリ語のブラッシュアップ、異文化体験、ボランティア活動、卒業論文のためのフィールドワークなど目的は様々であるが、教室の中で学んだことをベースにして、それぞれが貴重な経験を積んできているようである。

スワヒリ語の会話能力をアップさせて、ネイティブの教員とできる限り流暢なスワヒリ語でコミュニケーションを図りたいという願望は、多くの学生が持っている。ここ数年は学園祭での「語劇上演」も続けてくれている。語劇とは、旧大阪外大の学園祭、通称「間谷祭」の目玉商品で、各専攻語による演劇(OHPによる日本語の字幕付)のことである。専攻語でのセリフを覚えること、また、そのセリフのイントネーションや発話の時の感情表現を会得することで、出演者はよりその言語に近付けたと実感できるようである。我々教員は台本の翻訳の手直しくらいはするが、準備にはほとんど手を出さずとも学生たちだけで立派にやっている。

【非常勤スタッフ、外国人教師に恵まれた誇るべき歴史】

これまで我が専攻におけるアフリカ学教育が順調に進んできたのは、非常に贅沢な非常勤講師の先生



*TAKEMURA Keiko

1967年7月生
大阪外国語大学大学院外国語学研究所
アジア語学専攻スワヒリ語コース・修了
(1992年)
現在、大阪大学世界言語研究センター
准教授 修士(言語・文化学) スワヒリ
語学・文学・文化論
TEL : 072-730-5204
FAX : 072-730-5204
E-mail : takemura@world-lang.osaka-u.ac.jp

方をお迎えできたことによるところが大きい。我々専任スタッフ(米田、小森、竹村)が教学上カバーできる範囲は限られているからである。もちろん、外国語学部の真髄は語学教育にあり、スワヒリ語教育に関しては絶大の自信を持っているが、アフリカ学を志して入学してくる学生たちの興味は多岐にわたり、政治学、経済学、社会学、文化論、文学、人類学など、あらゆる分野の授業を開講する必要があり、また、それらの授業のためのスタッフを常に揃えることが、日本で唯一、学部からアフリカ地域研究を学べる我々の専攻の使命であろうと思う。

それから、忘れてはならないのがネイティブの教員の存在である。1986年に専攻としてスタートした時は、残念ながらネイティブの専任教員のポストがなく、それから4年半後の1990年10月、ようやく待望のタンザニア人教員に着任していただいた。それが、スワヒリ語作家としても世界的に著名なサイド・アフメド・モハメド・ハミス先生である。彼の後任も優れた研究者ばかりであり、現在はザンジバル大学スワヒリ語・外国語研究所のアシャ・ハミス・ハマド先生(2008年度～現在)に教鞭をとっていただいている。どの先生の授業からも、本当にスワヒリ語を愛し、スワヒリ語教育に情熱を傾けていることが伝わってくるので、受講する学生たちも自然と授業に引き込まれていくようである。先述した翻訳集作成や勉強会開催、語劇上演には、これらの先生方の支えが欠かせなかった。

【卒業生の役割】

2010年3月末で卒業生数が580名を超えた。就職先は決してアフリカと関係の深い企業や商社ばかりではなく、外国語学部の多くの「マイナー言語」専攻の卒業生と同じように、自分が学んだ専攻語を活かした職に就くことができるのは、ほんの一握りの学生たちである。これまでの卒業生の中で「スワヒリ語やアフリカ地域研究に基づく知識で飯を食べている」のは、筆者を含めて研究者になった者、NHK国際放送局の「ラジオジャパン」でスワヒリ語放送に携わっている者、アフリカ各地に駐在所を持つ企業や商社に勤めている者、JICA等のODA機関や国連諸機関、アフリカで活動するNGO・NPO団体に所属する者たちであり、卒業生全体に占める割合は2割程度である。異色の存在も数名いる。サ

ハラ以南アフリカで広く使われている民族楽器(日本では「親指ピアノ」と総称されている)のプロ奏者になったサカキマンゴー、ケニアの首都ナイロビで報道写真家として活躍し、2009年度の上野彦馬賞も受賞した森本徹などである。

しかし、こういった卒業生だけが「活躍している」のではない。その他の卒業生たちも、アフリカを学んだことで社会に潜む様々な不条理に気付くことができるようになり、一般の日本人の中にある「アフリカ理解」が歪んでいることも指摘できるようになっている。中には中学校や高校の英語教員となり、授業の中でアフリカやスワヒリ語についてしばしば語ってくれる人たちもあり、その教え子たちがまた我が専攻に入学してきている。こうやって、少しずつではあるが「草の根のアフリカ理解」に貢献していけるだろう。また、ほぼ毎年、本学大学院言語文化研究科言語社会専攻もしくは他大学の大学院に進む人がいる。いずれにせよ、学部時代に学んだことをさらに深く研究したいと考えている人たちであり、「アフリカニストの卵」と言っても良いだろう。十数年前、筆者もそうやってアフリカのことを考え続けたい、学び続けたいと思った一人であったことを忘れず、これからも卵たちを孵化させることに貢献していきたい。

【おわりに スワヒリ語ミニ講座】

最後になったが、スワヒリ語がどういう言語なのかを少しだけ紹介しておこう。現在、アフリカ大陸には2000言語くらいが存在すると言われているが、おそらくその中で最も有名なのがスワヒリ語だろう。東アフリカの地域共通語となっており、話者数は7000万人をゆうに超え、タンザニアとケニアでは「国家語(National Language)」にも制定されている。

スワヒリ語は、サハラ以南アフリカで最も広範囲に分布する「バンツー(Bantu)諸語」と呼ばれる言語グループに属しており、「きょうだい言語」としてはケニアのギクユ語やコンゴ民主共和国のリンガラ語、南アフリカ共和国のズールー語などが挙げられる。バンツー諸語に属する言語の特徴は、何と言っても「文法的性(ジェンダー)」の複雑さであろう。フランス語では全ての名詞が「男性名詞」と「女性名詞」のいずれかに属することはご存知だろうが、この「男性」とか「女性」という用語をもっ

て「文法的性」と言われる。バンツー諸語の場合、このグルーピングには「名詞クラス」という用語が使われるが、それは、「性」などという言葉で片付けられるほどハンパな数に分かれているわけではないからだ。毎年、新入生にこのグループ数を告げるとげんりされるのだが、スワヒリ語の場合はなんと「16クラス」にも分かれている。名詞クラスには番号が付けられており、1クラス、2クラスなどと呼ばれ、18クラスまで存在する（スワヒリ語では12クラスと13クラスが存在しない）。

各名詞クラスには「接辞」と呼ばれるものが数種類ずつ存在しており、申し訳ないがこれも各16通り存在する。長々と解説してもわかりづらいので、以下に例を挙げてみる。

<1クラス> mtoto wangu mzuri 「私の良い子供」
 <7クラス> kiti changu kizuri 「私の良い椅子」
 下線部が「接辞」と呼ばれる部分で、太字のanguが「私の」という所有詞の「語根」、zuriが「良い」という形容詞の「語根」である。つまり、接辞は変化するが語根は同じであることがわかりただけだろう。そして、最初の語mtoto「子供」、kiti「椅子」という名詞のアタマの部分がそれぞれ「1クラス」「7クラス」に属していることを示す「名詞クラス接辞」であり、以下の2つの語根のアタマについている接辞は、それぞれのクラスの名詞に呼応して現われたのである。

この、名詞クラスに呼応して接辞が現われるという文法特徴が理解できれば、スワヒリ語をはじめとするバンツー諸語の文法規則は8割方理解できたことになる。非常にシステムティックな構造なので、理系の方には興味深い言語ではないだろうか。

サハラ以南アフリカはほとんどが無文字社会だったため、現在の表記法はヨーロッパに植民地にされる前後に導入されたものである。スワヒリ語の表記には17～19世紀くらいまでアラビア文字が使われ

ていた（日本の「万葉仮名」と同じく、ただ表音のためだけに使われていた）が、1930年に植民地政府によって正書法が定められ、全てローマ字表記となった。ちなみに発音は日本語のローマ字読みとほぼ同じなので、日本において小学4年生以上の教育を受けた人なら、とりあえずは読める。「ヒエログリフ」のような文字を想像しておられた方々は肩透かしを食った感じかも知れないが、「文字」ではなく「声」で歴史を伝えてきたアフリカの人々の言葉は、「読む」だけではなく「聞いて」味わってもらいたいというのが本音である。

（スワヒリ語要旨）

Idara ya Kiswahili iliundwa mwaka 1986 katika Chuo Kikuu cha Masomo ya Kigeni cha Osaka, sasa imekuwa idara moja ya Kitivo cha Masomo ya Kigeni, Chuo Kikuu cha Osaka. Mpaka sasa, katika idara yetu, walimu na wanafunzi wamejitahidi kusoma Kiswahili na Masomo ya Kiafrika ili wao wenyewe wawe daraja la kuunganisha Japani na Afrika. Kwa bahati, matunda mazuri ya jitihada hiyo yamepatikana tayari. Kwa mfano, katika wanafunzi waliohitimu idara yetu, wengine wamekuwa wafanyakazi wa kampuni zenye matawi huko Bara la Afrika, au wafanyakazi wanaojishughulisha na ODA ya nchini Japani, misaada inayotolewa na Shirika la Kimataifa kama UNDP au NGO na NPO. Tena wengine wamekuwa walimu wa shule za sekondari za chini na za juu, wanawasomesha wanafunzi Kiingereza. Hao ndio wanaowapa taathira kubwa sana watoto na vijana wa siku hizi, kwani katika madarasa yao wanaweza kuwaambia na kuwaonyesha hali ya Bara la Afrika ilivyo na wanaweza kuwapa maelezo yasiyowaletea nyoyo za ubaguzi.